

四条町の成立

2014年は京都祇園祭の歴史に記録される出来事があった。

禁門の変で焼失し休鉢になっていた大船鉢(凱旋船鉢)が、150年ぶり復活を果たして巡行に復帰したこと、それを契機に後祭りが復活し、7月24日にはほぼ50年ぶりに10基の山鉢が新町通、御池通、河原町通、四条通を巡行したことである。

大船鉢を復活させた母体は公益財団法人四条町大船鉢保存会であるが、その元は四条町の町衆である。その四条町の成り立ちを考察してみよう。

四条町の位置は、現在の京都市街区のほぼ中央を、南北に走る烏丸通と東西に走る四条通の交点四条烏丸から西へ二町(約200m)、四条通と新町通の交点から南へ新町通と綾小路通の交点までの両側一町(約100m)である。住居表示は「下京区新町通四条下ル(または綾小路上ル)」である。

この位置は平安京成立時期から明瞭に存在していた。延喜式をもとにした復元図だという平安京図(『岩波・日本史辞典』、『京都府の歴史』山川出版社)の左京(朱雀大路の東側)のほぼ中央を南北に走る「町尻小路」の「四条大路」と「綾小路」の間である。町尻小路は、東の室町小路、西の西洞院大路に挟まれており、室町、西洞院いずれも現存する通りだから、町尻小路が現在の新町通であることは疑問の余地がない。

平安京図の町尻小路は、二条大路の先で修理職町とその北に接する左衛門町いう方二町の二つの役所に突き当たって一条大路に貫通していない。『拾芥抄』の東京図では修理職町・左衛門町より北を町口、南を町尻と称している。「町尻」は鎌倉期には『兵範記』の「一条南、町東」のような記述から「町」という呼称になったと推察でき、室町期から江戸期の市街図ではいずれも「町小路」と標記されている。「新町」という呼称へは近世後期から近代初期に変わったのであろう。

京都市中に「町」という固有名詞の街路を現出させた原因を、赤松俊秀(『町座の成立について』

日本歴史 21 号)は商人たちの「座」が多く集まっていたことにあると指摘した。林屋辰三郎(『町衆』中公文庫)は、町座の存在を可能にしたのは修理職町という内裏修理一切を司り専門職を多数擁する大型官庁の大きな需要があったからだと述べる。町尻から町を経て町小路へ、この通りは商業エリアとして発展して行ったのである。

この町小路に「四条町」がいつ発生したのかは明らかでないが、調べた限りで四条町の名が現れる最も古い文献は藤原定家の日記『明月記』である。『明月記』には四条町の名が複数回出てくるが、その名の町の位置を現在の四条町と同じだと同定できるのは、寛喜 3 年(1231)正月の次の記述である(冷泉家時雨亭叢書第 60 卷『明月記・五』)。

「十五日壬寅天晴大風夕休…南方出火煙炎熾盛久不滅以下人令見曉鍾以後滅了帰来云自四条町出南綾小路北六角町四条坊門以南西洞院室町商売輩悉焼云々」

一月十五日は晴れたが風が強くて夕方まで吹き荒れた。わが邸の南方から火が出て煙や焰が激しく容易に消えなかつた。下人を見にやつたあと暁の鐘を聞く頃によく鎮火した。下人の報告では、四条町から出火して綾小路より北へ燃え広がり六角町南端の四条坊門まで焼けた。東西は室町から西洞院までの商家は悉く燃えてしまった、という内容である。六角町は新町通の六角通と蛸薬師通の間にあり、文中の四条坊門は現在の蛸薬師通のことである。したがつて、この火災は綾小路から蛸薬師まで南北 3 町、室町から西洞院まで東西 2 町、約 60000 m² が焼けたことが分かる。大火が多かった京都では小火の類ではあるが、この火事のおかげで四条町の存在を明らかにすることができた。

『明月記』には、これより先建仁 2 年(1202)3 月 1 日にも「四条町有火」の記述がある。さらに「『町』を南北路の名称として考えることになると、東西路の交点に『三条町』『四条町』、さては『七条町』ができるのも、きわめて自然に理解される」(林屋:前掲書)という先行研究者の記述も考え合わせ、現在の地に四条町が成立したのは平安中期と推測してもよいのではないか。新町通の実体は平安京成立時からあつたが、「新町」という通りの名称は多分 200 年少々の歴史しか有しない。一方、四条町は名実共に 1000 年を超える歴史をもつ町ということになる。